

Japanese 100 Great Mountains Vol. 6: Episode 026-030 (Jp)



(邦題『百名山ピークハント Vol. 6: Episode 026-030』)

Originally written in Japanese and translated by Hodaka

Photographs by Hodaka

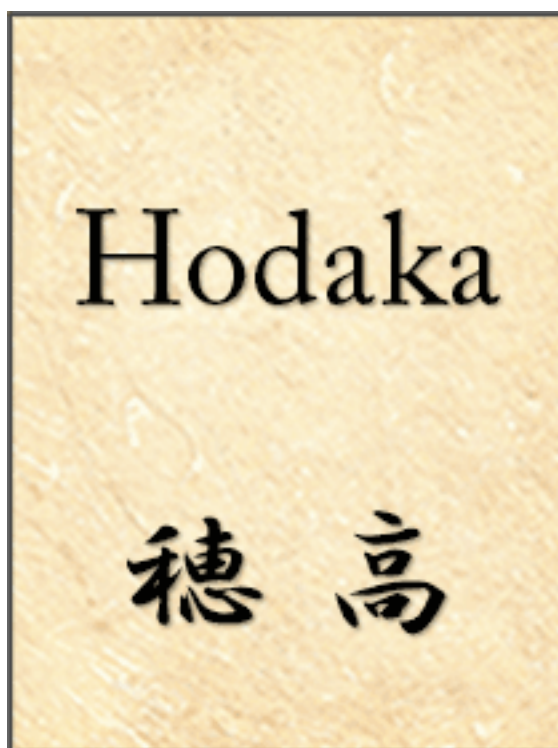
Cover design by Tanya

Copyright © 2021 Hodaka / The BBB: Breakthrough Bandwagon Books

All rights reserved.



The BBB ウェブサイト（日本語版）
<http://thebbb.net/jp/>



穂高著者ページ
<http://thebbb.net/jp/cast/hodaka.html>

Episode 026: 仙丈ヶ岳（せんじょうがたけ）



ちょうど1年前、南アルプスの甲斐駒ヶ岳（かいこまがたけ）と仙丈ヶ岳を登るため、北沢峠へテント泊をしましたが、2日目は雨のため、登れたのは甲斐駒ヶ岳だけでした（Episode 018 参照）。今回はそのとき登頂出来なかった仙丈ヶ岳を目指します。せっかくなので、今回は山小屋に泊まることにして、天気や日程の都合で土日に行くことにしました。

南アルプスへのアクセスはマイカー規制があり、バスやタクシーを乗り継いで行くのですが、土日は早い便が出て相当混み合います。5:15 始発のバスの1時間くらい前にはマイカー駐車場である芦安（あしやす）に着きましたが、既にバス乗り場付近の駐車場はすべて満車で、徒歩で10分ほどかかる第5駐車場まで戻されました。ザックに荷物を急いで詰め込んで準備し、バス乗り場に向かうと既に長い列になっていました。



バスは先発の3台が待機していて、なんとか3台目のバスに座ることが出来ましたが、その後も乗客が増えてバスの通路までぎっしりになりました。ここから1時間近く走ると広河原へ到着します。登山口となる北沢峠へはここでまたバスに乗り換えるので、すぐ切符売り場へと並びます。



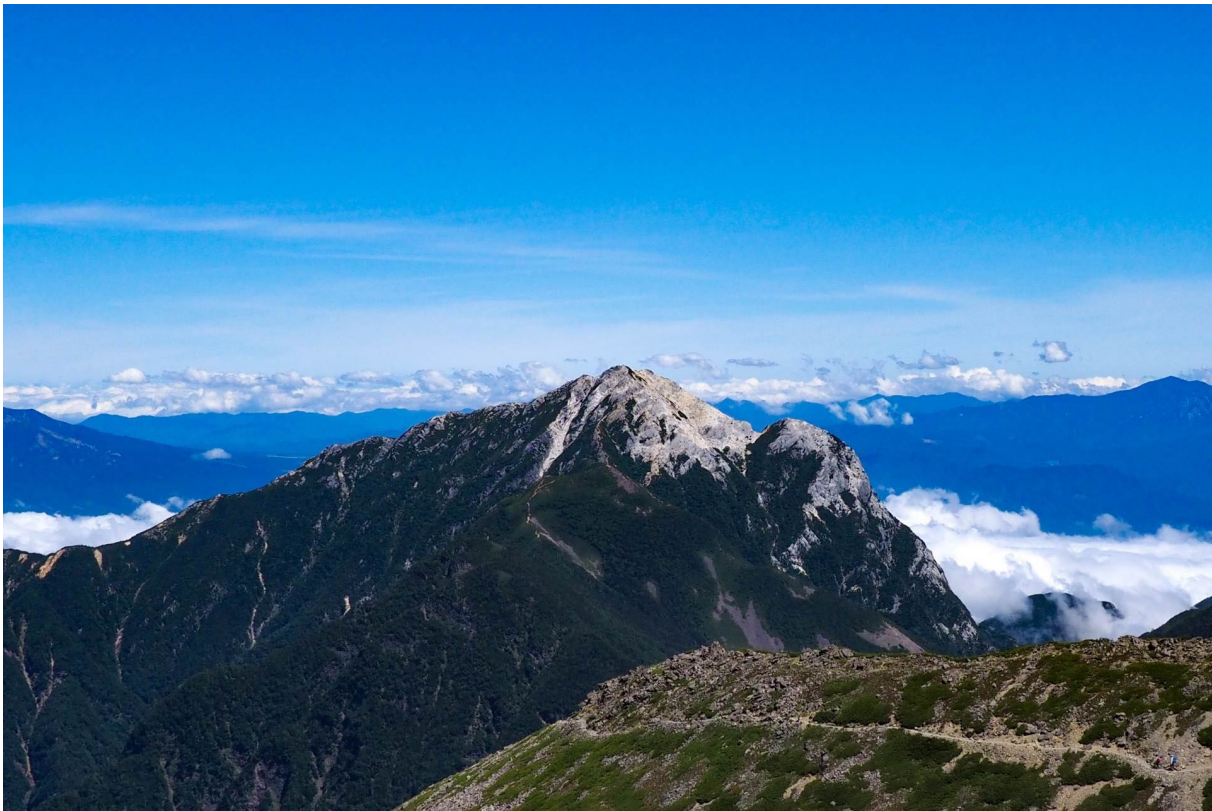
ここも長蛇の列でバス停は反対側にあるので、いったんバスの列にザックを置いて並び直すと、次々にバスが到着して登山者が増えてきたので、先にバスの列にザックを置いたのは正解

でした。バスは補助席まで使って満席となって出発し、7:00 頃に北沢峠へ到着しました。朝食のパンを食べながら、パッキングをし直して登り始めます。



仙丈ヶ岳 (3,033m) は、その優美な山容から「南アルプスの女王」と称され、ハードな甲斐駒ヶ岳とは対照的です。山頂付近はカールになっていて、そこに山小屋があるので、去年だったら体験出来なかった山小屋泊にしました。台風が近付いてましたが、明日までは天気も良好そうで、この日を待った甲斐がありました。

気温は 30 度を超える暑さの中、樹林帯を登って行きます。登山道が分岐点となる 5 合目で休憩していると、続々と登山者が登ってきたので先を急ぎます。森林限界を超えて振り返ると昨年登った甲斐駒ヶ岳の白い山頂が綺麗に見えます。これから先は振り返れば、甲斐駒ヶ岳見えるので気持ち的に楽です。



麓（ふもと）のテン場が見えて、望遠で撮影するとかなりのテントが張ってあります。
2,855mの小仙丈ヶ岳まで来ると、仙丈ヶ岳までのカールが綺麗に見えて夏のアルプスという
光景です。しばらく緩い稜線を歩いて行くとハイマツ地帯になり、雷鳥を探しましたが出会え
ませんでした。仙丈ヶ岳の頂上が見えてくると、右側に藪沢（やぶさわ）カールが広がり、そ
の下には今日泊まる仙丈小屋が見えています。



頂上は登山者で混雑していて、山頂標識の前は列になって写真の順番待ちになっているほどです。人が多くてどうしても写真に写り込んでしまうので、少なくなるのを待ちながら山頂奥の方で食事を取ることにします。この頂上から山小屋までは30分もかからないのでゆっくりと過ごし、日帰りの登山者達は16時の最終バスに合わせて下山して行くので、だいぶ人が少なくなってから改めて山頂標識などを撮りました。



山頂からの眺めは素晴らしく360度見渡せ、カールを見下ろすような山頂はこれまで登った百名山の中ではないと思います。太陽の照り付けがきつく、十分に山頂を満喫したので山小屋へ向かいます。

山小屋の前はベンチとテーブルが置かれた広場になっていて、眼下には伊那（いな）の街が見え、見上げるとカールに囲まれた素晴らしい立地です。近くにも山小屋はありましたが、ガイドブックや写真を見てこの立地に惹かれてここに決めました。しかも、後で知ったことですが、小屋から15分ほど歩くと絶好の日の出スポットがあり、運が良ければ富士山、北岳、間ノ岳（あいのだけ）と日本の標高トップ3を一度に眺められます。



受付を済ませると宿泊部屋に案内してくれました。2階の受付をいったん出て、外の階段を登って3階になる場所です。16人ぶんの布団がずらっと並べられている部屋で、到着が早かったので一番端の寝床になりました。入口に近く、寝床の横にザックや荷物を置けるスペースがあったので、部屋を出やすいベストな場所です。



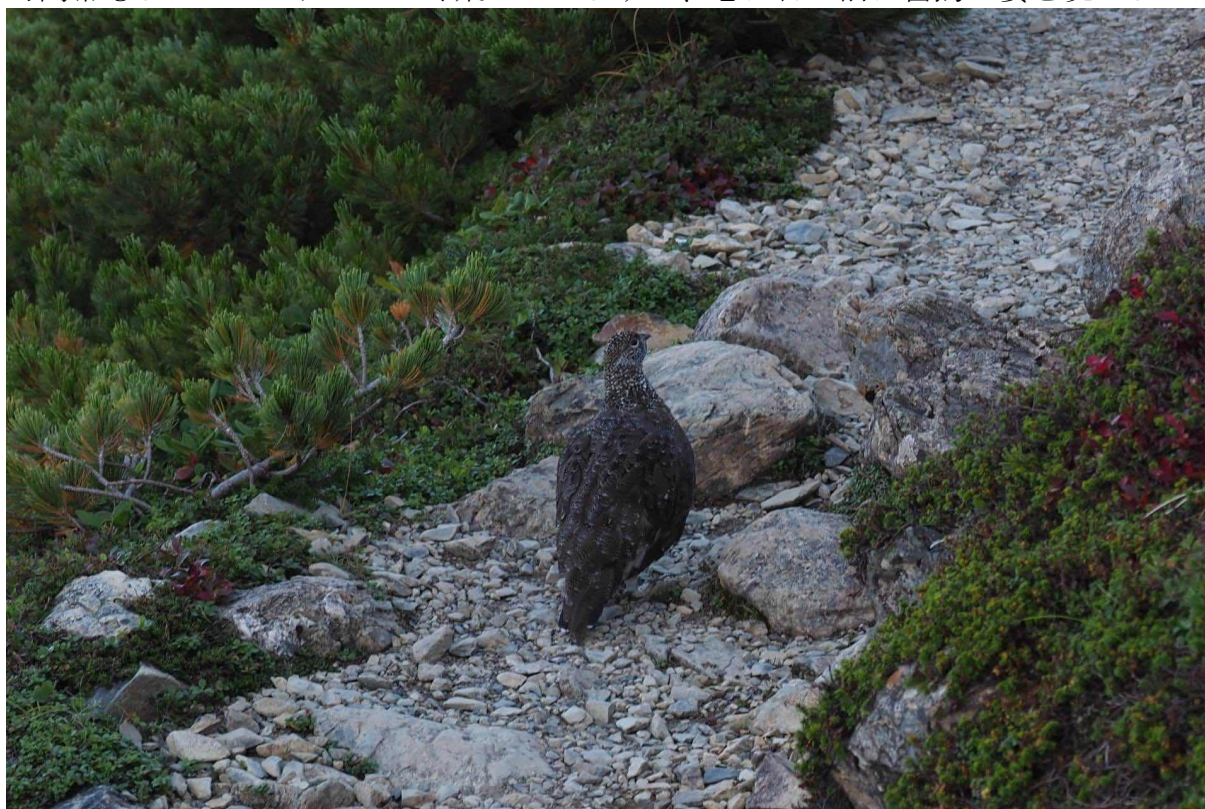
外は気持ちよく晴れていて、藪沢カールと青空のコントラストが綺麗で何枚も写真を撮りました。グループで来ている登山者達は外のベンチでビールを飲んで盛り上がっています。山小屋にある本を読んで、布団に横になって少し休んでいると、その後も次々と登山者がやってきて布団も全部埋まりました。



夕食は17時からでスタッフが呼びに来てくれました。山小屋の収容人数は55人で、この日は満室のようで食堂は宿泊者でいっぱいです。食事はハンバーグとエビフライで山小屋としては豪華なおかずです。しばらくして、山小屋の管理人から挨拶があり、山小屋の注意事項や天気について話がありました。また、「いつもはすぐにガスってしまうけど、今日はずっと晴れていて今年3本の指に入るぐらいのベストコンディションです」と言うと、食堂は大いに盛り上がりました。続けて、「今は霧が出てきてますが、夜には下がって星と日の出は見れると思います」と話してくれました。



食後、外はまだ明るいので日の出が見えるというスポットに行ってみます。
仙丈ヶ岳では登山中にハイマツの上を飛んでいる鳥をよく見かけ、一瞬「雷鳥？」と思いますが、それはホシガラスという鳥で高山に棲み、ハイマツの実を好んで食べます。そして、この時間帯もまたホシガラスがよく飛んでいます、急に目の前に雷鳥が姿を現しました。



明らかにホシガラスとは違い、ゆっくり近付くと登山道で横になったり、中腹の草木の中に入り木の葉などをついばんだりしています。雷鳥は特別天然記念物に指定されていて、晴れた日は天敵から身を守るために姿をあまり見せないと言われていますが、写真を撮っているとさらに上の方に3羽もいました。日本では昔から雷鳥を神の使いとして大切にしてきたので、人間を警戒せず近付いてもあまり逃げようとはしません。ただし、それは日本の話で雷鳥を食べる国もあって、そこでは人間を見ると一目散に逃げ出すそうです。

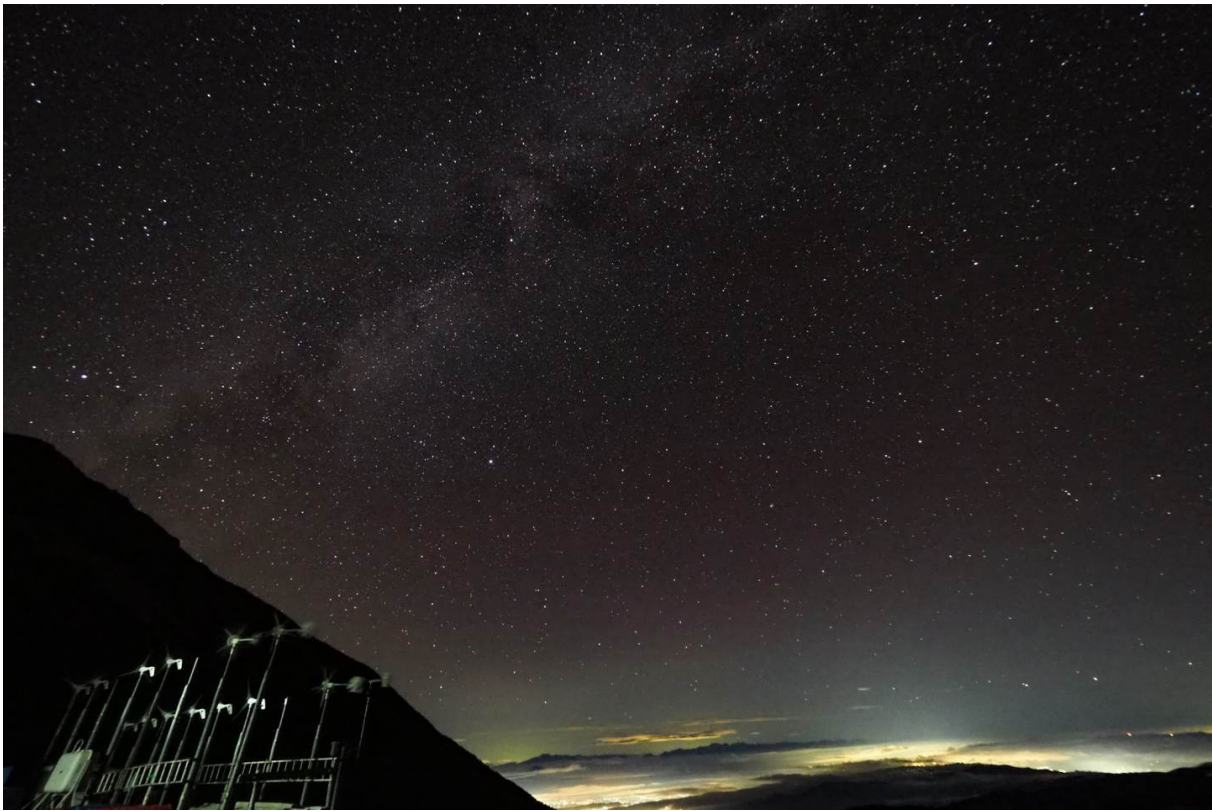


日の出が見えるベストスポットに行くと、もうすぐ日が沈む頃で麓の街灯りがだんだんと目立ってきます。今回の山行では星空を撮るつもりで大きい三脚を購入して持ってきたので、この夕焼けの撮影の時に使用してみました。上空は晴れていましたが、山の下から雲が湧き出てくる様子です。

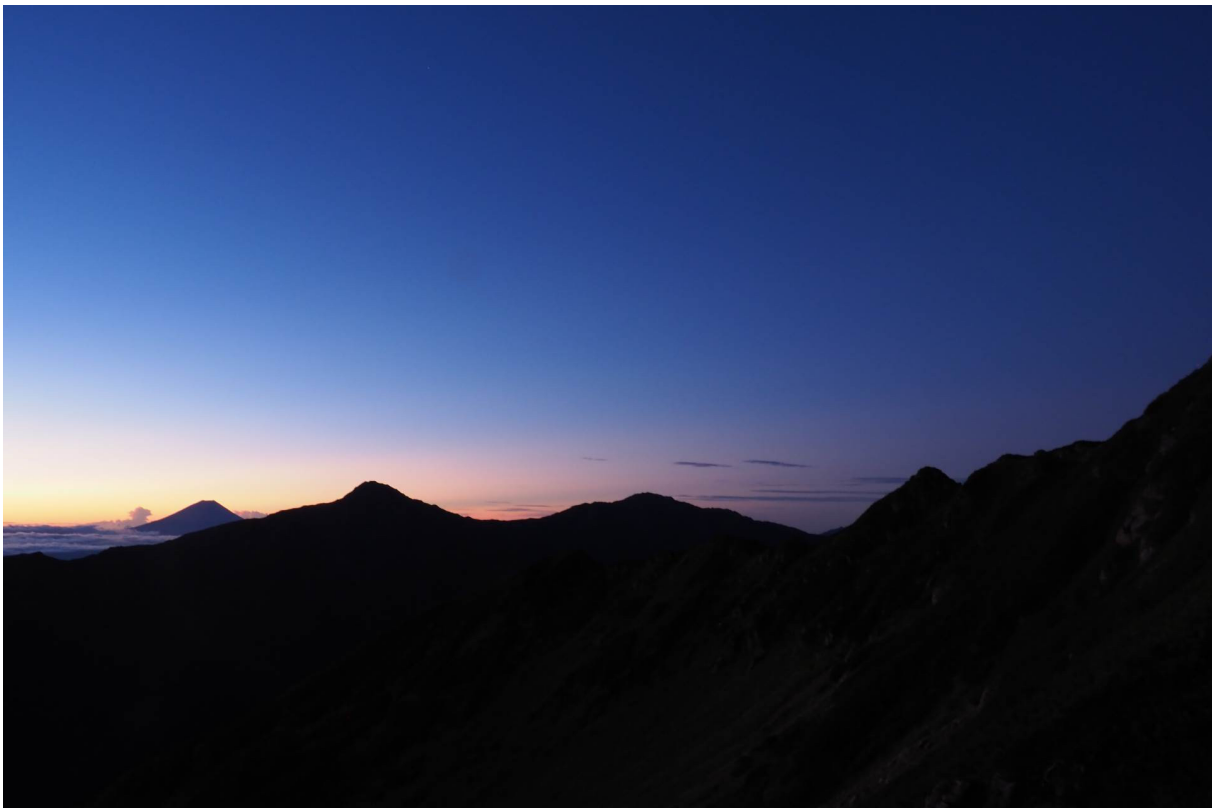


日が沈み暗くなってきたので、ヘッドライトの灯りを頼りに山小屋まで戻ると、小屋前の広場からも伊那の街が見え、花火が上がっているのが分かります。星を撮ろうと思いましたが、上空にガスがかかり全く見えなくなっていました。

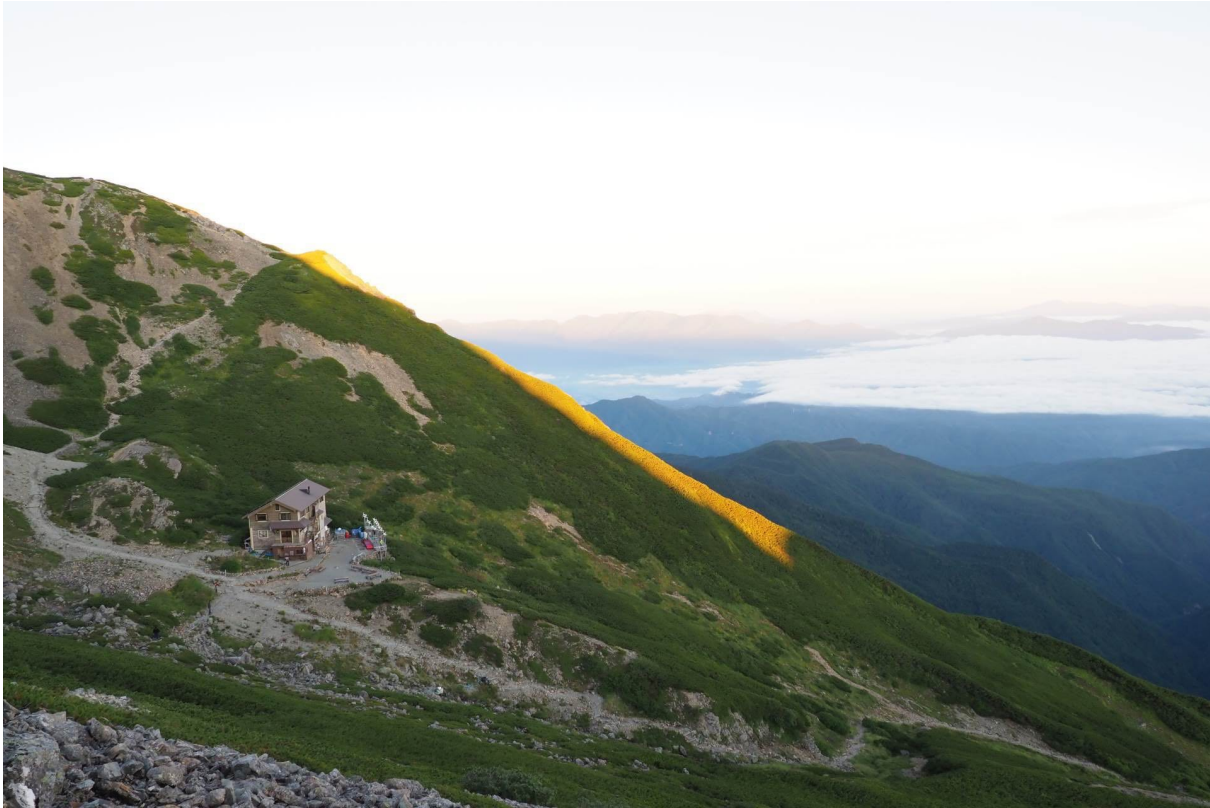
山小屋の消灯時間は20時なので、いったん部屋に戻り、夜中に出られるように、カメラのレンズを換え、撮影道具を揃えて準備をしておきます。20時になるとスタッフが電気を消して、すぐに眠りについて、ふたたび目を覚ますと0時前でした。窓から外を覗くと星が見えたので、荷物を持って静かに外に出ます。すると、ガスはすっかり晴れていて満天の星が広がっていました。真上には天の川が見え、山でこれだけはっきり天の川を見たのは初めてだと思います。



三脚をベンチの前にセットして、カールや山小屋、伊那の街にカメラを向けて撮影します。これまでは小さいサイズの三脚で撮っていましたが、それほど寒くもなく夢中で撮っていると、小屋から2人組が出て来て、登山道の方へ向かって行きました。しばらくすると頂上から彼らのヘッドライトの光が見えたので、真夜中に登頂を試みたようです。1時間近く星空を撮影して部屋に戻って再び寝ました。



5時前に目が覚めると、もう何人かは布団を出て日の出を見に行っているようでした。5:15頃が日の出でその前に昨日の夕方に撮影した場所に行くと、山小屋の管理人が言ったとおり素晴らしい瞬間に会えて、標高トップ3の山の共演も見られました。

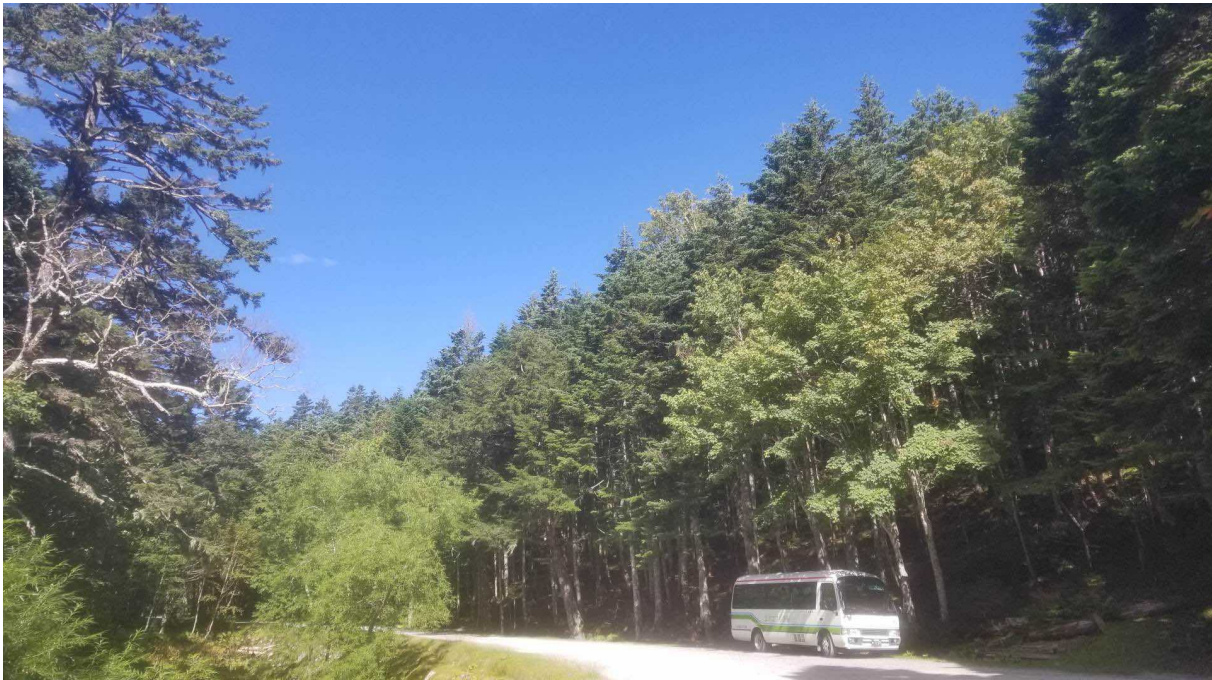


山小屋に戻って朝食を済ませ、6時過ぎに出発し、あとは北沢峠まで一気に駆け下りるだけです。今日の夕方には台風が近付くようですが、日帰りで登ってくる登山者も結構います。いいペースなので予定より1本前のバスに間に合うかと思って少しペースを速めましたが、登ってくる人が多いのと岩場なので怪我をしないように用心して、無理はせず、最後はゆっくり戻りました。

とりあえずバス停の待合場所のイスにザックを置いておきます。イスには番号が書いてあり、この番号順にバスに乗車出来るのです。順番は3番目で9:45発のバスまで2時間ほどあり、安心して近くの山荘に行ってコーヒーでも飲むことにしました。



この山荘には山に関する本や写真集が沢山あったので退屈することはありません。早めにバス停に戻ると待合室の座席は溢れかえっていました。バスを待つ間、隣の人と山の話で盛り上がりました。鹿児島県から1人で来たというその女性はバスの中でも九州や西日本の山のことを詳しく教えてくれました。広河原に着いて、切符とバスの列で手分けして並ぼうとしましたが、乗り合いタクシーが待っていてバスよりも早く出発して芦安で別れました。もし去年の登山で仙丈ヶ岳に登れていたら、山小屋からのあの満天の星を見ることはなかったと思うと、今回の仙丈ヶ岳は最高の登山でした。



Episode 027: 木曽駒ヶ岳（きそこまがたけ）



中央アルプスの木曽駒ヶ岳と空木岳（うつぎだけ）を縦走する予定で、前日に木曽駒ヶ岳の山頂にある山小屋へ電話予約をすると、とても親切な応答で対応してくれました。木曽駒ヶ岳は木曽山脈の最高峰で、標高 2,956m であるにもかかわらず、ロープウェイを利用して2時間ほど登れば登頂出来るので、多くの登山者が訪れます。短時間で登れるので時間的にも余裕があります。朝早くから登り始める必要もないので、明け方に家を出ました。いつもは明け方から登り始めるので新鮮な気分です。



東京から中央道で名古屋方面に向かい、途中でパンが美味しい八ヶ岳（やつがたけ）PA で朝食を済ませます。長野県の駒ヶ根（こまがね）インターで高速を降り、9時過ぎには菅の台（すがのだい）バスセンターへ到着しました。木曽駒ヶ岳へはマイカーで来られるのはここまでとなり、ここからはバスでロープウェイ乗り場まで向かうことになります。シーズン中の週末は大変混み合いますが、平日ということもあり、ほとんど登山客はいませんでした。9:45 にバスが出発すると、ヘアピンカーブの山道を登り 30 分ほど揺られると、ロープウェイ乗り場、しらび平（だいら）駅に到着します。日本一の高低差（950m）を誇るこのロープウェイは、約 60 人乗りで 30 分間隔で運行しています。混雑時はこのロープウェイに乗るのに 3 時間も待つことになるというから驚きです。わずか 7 分半で標高 2,612m の終着点の千畳敷へ到着します。このロープウェイの山頂駅が日本で一番高い駅とされていて、さらに駅にはホテルが併設され、こちらも日本一標高の高い場所にあるホテルとなっています。



登山届を提出して建物の外に出ると、日本の三大カールのひとつである千畳敷カールが広がり、鋭い岩壁が聳え立つ宝剣岳（ほうけんだけ）が青空に映えている絶景が目に入り、中央アルプスの代表的な風景が現れます。ロープウェイに乗るだけでこの景色を見れるので、登山をしないで普通の服装で来る人も大勢います。

写真を撮っていると、下からガスが上がってきて山は真っ白い霧に包まれて、何も見えなくなっていました。その後は、ほとんど霧の中で視界が開けなかったのですが、ちょうど絶景を見られる良いタイミングで到着できました。

時間はたっぷりあり、山頂目指してゆっくり登って行くので、急勾配の岩場でも、ほとんど疲れません。霧が晴れて青空が一瞬広がったかと思い、カメラを取り出してるうちに再び真っ白になってしまうほど、雲の動きが早かったです。



登り始めてから1時間弱で乗越浄土（のっこしじょうど）と呼ばれる景色が広がる稜線に到着します。といっても、霧が晴れないので登山道しか見えません。

ここから山小屋までは1時間ほどで、まだ昼過ぎだったので、お湯を沸かして食事にします。たまに晴れて青空が広がると登ってきた登山道が見え、宝剣岳の山頂にも人影が見えました。それから、中岳（なかだけ）を超えて山頂に向かう途中で、頂上山荘を通り過ぎます。ここは初めてテント泊をした思い出のある場所です。

14時前に木曾駒ヶ岳への山頂に登頂しました。山頂には大きな祠（ほこら）が祀（まつ）られ開放感のある場所で、その頃は雲が多いものの青空も広がり、景色を見渡せました。



今晚泊まる山小屋は山頂から5分ほど下った場所にあります。赤い屋根に大きく「木曾頂上小屋」と書かれているので、すぐ分かります。山小屋に到着すると、電話で話した管理人が出てきて声を掛けてくれ、食堂で受付手続きを済ませると、お茶とお菓子を出してくれました。100人泊まれる大きな山小屋ですが、今晚は宿泊客は少なく、広いスペースをゆったり使えました。



部屋には関西から来た年配の女性2人と名古屋からの男性1人が先にいて、挨拶して少し話しました。男性は何日かこの山小屋に滞在していて、この日は宝剣岳の先にある三ノ沢岳（さんのさわだけ）という山に行ってきたそうです。

17時半の食事まで、布団に横になったり読書をして過ごしていると、主婦3人組の宿泊客がやってきて賑やかになり、夕食は和気あいあいと7人で話しながら食べました。食後もお茶を飲みながら山の話が続けて、地元や旅の話にもなって盛り上がりました。



外は霧が濃くなって、星は全く見えません。テレビの予報を見ると、明日も天気は回復する気配はなく、しかも午後からは雨という予報です。みんな落胆していたので、先日、仙丈ヶ岳に登ったとき（Episode 026 参照）の星空や日の出の写真を見せると、喜んでもらえました。空木岳の縦走は諦めて、午前中には下山しようと思いましたが、朝に状況をみて決めようと思います。20時半の消灯後は、すぐに眠れました。0時過ぎに目が覚め、トイレに行くついでに外に出てヘッドライトで空を照らすと、相変わらずの霧で、霧雨になっていました。



4時50分に起床し日の出を期待しましたが、天気は夜中から変化がなく、霧で何も見えません。名古屋から来た主婦達の中には初めての登山だった人もいて、日の出を見られずに残念がっていました。朝食後、宿泊客のなかで一番早く出発し、木曽駒ヶ岳の山頂を超えて、その先の中岳をマキ道で進み、乗越浄土まで戻ります。

晴れていれば、ここから1日かけて空木岳まで縦走するつもりでしたが、この天候なので別の機会にすることにしました。ですが、せめて宝剣岳を超えて下山することにしました。



宝剣岳は乗越浄土から 20 分の標高 2,931m の山で、岩場が険しく数百メートル下まで絶壁になっています。岩が滑りやすいのでクサリを使い慎重に登って行きますが、岩場の下は霧で全く見えないので怖さはなく、スリル半減という感じでした。そう思っていると、一度、足を滑らせてバランスを崩すと、すぐ横は断崖となっていて危ないところでした。そういえば、ロープウェイに向かうバスで後ろの乗客が、宝剣岳から滑落すると身元も分からなくなるそうだと話していたのを思い出しました。

宝剣岳を超えても時間に余裕があったので、山小屋の男性客と話した三ノ沢岳まで行ってみることにしました。

ふだんから三ノ沢岳まで来る登山者は少なく、この天気では尚更です。途中、誰とも会いませんでした。雨は降っていませんが、腰の高さほどあるハイマツの道が続き、露でズボンと靴はびしょ濡れです。何度か霧が晴れそうになりますが、すぐまた霧で覆われてしまいます。山頂には小さな山頂標識があって、しばらく休みましたが下山するまで霧は晴れませんでした。



三ノ沢岳から極楽平まで戻り、ロープウェイ乗り場に向かって下っていると、1人の登山者が登ってきます。この先の道を聞かれたので教えて、しばらく話し込みました。その女性は麓に住んでいる方で、ロープウェイの年間パスを利用して、気が向いたときに登ってくるそうです。年間パスという存在は知らなかったですが、料金的にはかなりお得なので、近くに住んでいたらぜひ利用したいと思いました。

ロープウェイの千畳敷駅に到着し、濡れたザックカバーやアウターをしまい、時間もあったので標高にちなんだ“2612Café”というお店でコーヒーを飲んで暖まることにします。昨日見えていた宝剣岳もこの日は全く見えず、団体ツアーがロープウェイから降りてくると残念がっていました。



13時発のロープウェイで降りて、バスに乗り継いで菅の台バスセンターまで向かいます。途中で温泉前のバス停に泊まると2人乗客が乗ってきて、「あら？」と言われました。見ると山小屋で一緒だった関西の2人組でした。彼女たちは下山した後、まっすぐ温泉に来たとのことで、思わぬ再会を喜びました。

駐車場に戻って着替え、近くの温泉「こまくさの湯」へ向かいます。体も冷えていたので、ゆっくり暖まって癒されました。さっぱりした後は、事前に調べていた駒ヶ根市のご当地グルメ「ソースカツ丼」を食べることに決めていました。付近にいくつか店舗がありましたが、選んだのは温泉からすぐの「明治亭」です。器から溢れんばかりのソースカツ丼に感激し、その味にも大変満足でした。



Episode 028: 蓼科山（たてしなさん）



秋にテントを買い替えて（2019）年内には試してみたいと思い、テント場がある山を検討して、尾瀬（おぜ）にある百名山に行こうとしましたが、山小屋の営業が10月末までで間に合いませんでした。そこで、他の山を検討した結果、八ヶ岳の蓼科山に登ることにしました。蓼科山は、その均整のとれた円錐形の山容から「諏訪（すわ）富士」とも呼ばれています。標高は2,531mで、中腹までは針葉樹の深い森に包まれ、山頂部は大きな岩が積み重なった溶岩ドームとなっています。また大きな水がめとしての機能もあるので、この周辺にはいくつかの池があり、麓を流れる川を通して人々を潤してきたことから水の神、農耕神として崇められてきたといえます。

蓼科山には以前、日帰りで登ったことがあったので、次に登るときは山小屋に泊ってみようと思っていましたが、その山小屋も11月初旬には営業を終えていました。色々と調べていると、この時期に蓼科山エリアで唯一営業していて、テント場もある双子池ヒュッテという山小屋があることが分かりました。他の山小屋は山頂付近にありますが、この双子池ヒュッテは少し山頂からも遠い場所に位置しているので、これまで知りませんでした。さらにインターネットで詳しく見ると、双子池の水辺のすぐ前にテントを張れて、天気が良ければ水面に映る星も撮れるという絶好の場所のようです。水辺にテントが張ってある画像を見ていると、とても静かで魅力的な雰囲気だったので、初めてのテントを使うにはいい場所だと思いました。



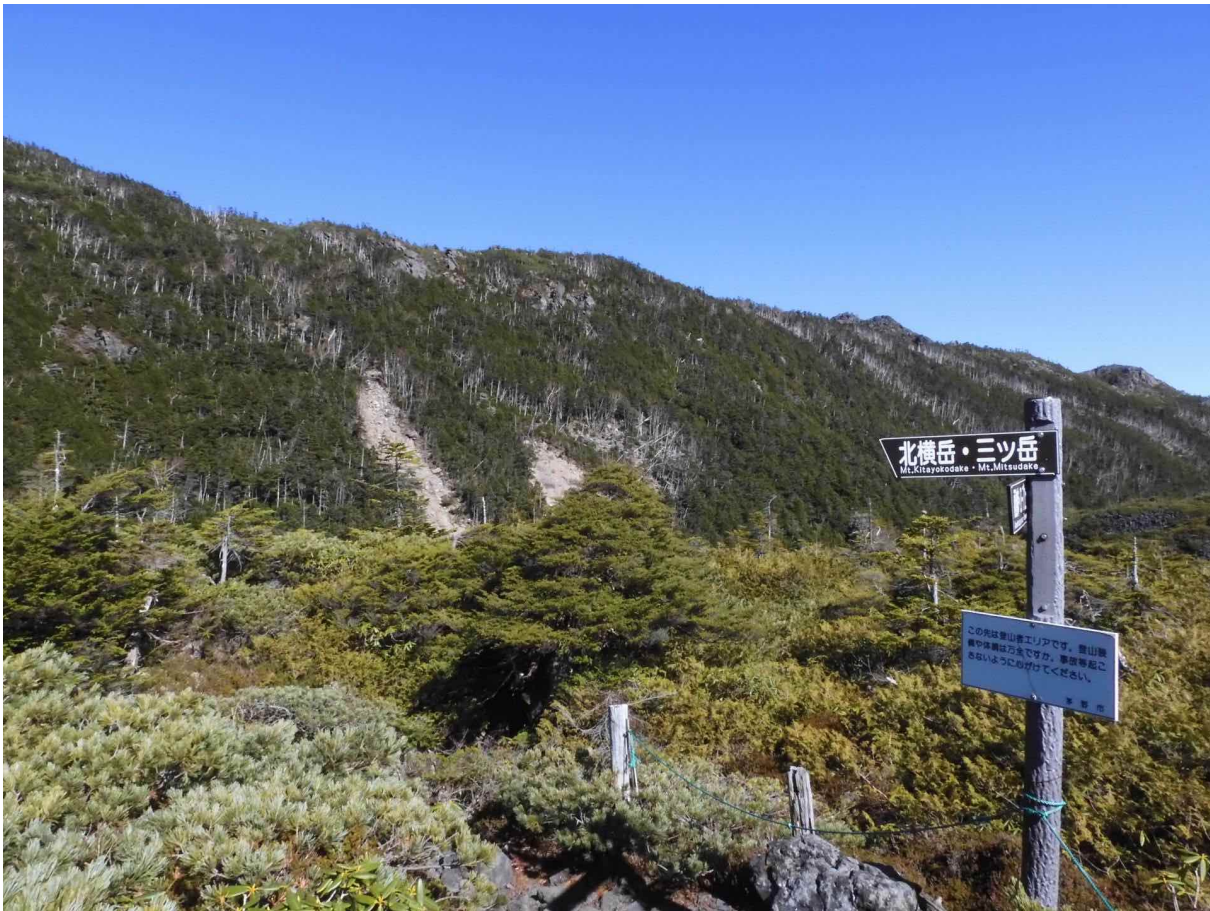
今回の山行も登り始めの時間には余裕があるので、6時頃に自宅を出て、ゆっくりと登山口へ向かい、9時半に北八ヶ岳ロープウェイ乗り場に到着しました。ここは冬はゲレンデにもなるので、とても広い駐車場があります。前回、登ったルートとは異なり、今回はロープウェイを利用して北横岳を経由して蓼科山へ向かうことにします。

ロープウェイのチケットは往復で買うといくらか安くなります。この日はテント泊をするのでチケットを購入するとき、「復路のチケットは明日でも使えますか？」とチケット売り場の人に聞くと、「大丈夫ですよ」と言われたので、往復で購入することにしましたが、この会話後に今回の山行に大きな影響を与えることになりました。



10 時 20 分にロープウェイを出ると約 7 分で終点の山頂駅へ到着します。ここは八ヶ岳の噴火で形成された国定公園で周遊できるコースがあって坪庭となっています。

北横岳へ行くには、途中で登山道に入って行き、40 分ほど山道を登ると北横岳ロッジに着きます。この山小屋は群馬県でレストランを営んでいる夫妻と出会った場所でもあって、思い出のある場所です（Episode 025 参照）。小屋の横にはテーブルがあり、休憩場所になっているのでここで食事を取ることにします。ここから 15 分ほど登って、北横岳の山頂へと到着します。ロープウェイを降りてから 1 時間ほどで山頂まで来られるので、多くの人で賑わっています。



北横岳の山頂は南峰と北峰の二つのピークがあり、最初に登頂した南峰から5分ほど歩くと北峰へ着きますが、ここまで来る人はあまりいません。そして、ヒュッテへ向かうには、ここから大岳（おおたけ）という山を経由して、さらに奥へと進みます。一度、2人組の登山者として違ってからは、誰とも遭遇しませんでした。

登山道は巨大な岩の上を移動し、周囲はジャングルのように木が茂り、秘境を歩いているような感じです。迷いそうな箇所もありましたが、ようやく池が見えて双子池ヒュッテへ到着しました。



受付をしながら、山小屋の管理人に明日の行程を聞かれ、「蓼科山へ登ってからロープウェイで下山します」と答えると、「ロープウェイは今日で運休になるよ」と言われました。

先ほどチケット売り場の人に確認したことを話すと、その人から山小屋に、「間違えて伝えてしまい申し訳ありません。明日来てもらえれば払い戻しします」と電話があったとのことで、思わず膝から崩れ落ちそうになりました。管理人も気の毒そうに、一緒に明日の行程を検討してくれましたが、後でゆっくり考えることにします。

双子池はその名のとおり、雄池（おいけ）と雌池（めいけ）の2つあり、テント場は山小屋から10分ほど歩いた池の反対側にあります。写真で見たあの居心地の良さそうな場所に期待を膨らませながら歩いて行くと、テント場へ向かう道は途中で水浸しになっています。そして、遠回りして行くうちに、先日の台風の影響で増水していることに気が付きました。前月（2019年10月）に長野県や関東地方に甚大な被害をもたらした記録的な台風があり、なんと、テント場は全て水没していたのです。



仕方なく、テントは少し上にある笹の合間のスペースに張ることにして、設営に取り掛かります。確かにすぐ前に池はありますが、笹草で囲まれていてテントからは見えない状態です。初めて使うニーモ（NEMO）というメーカーのテントは、2人用でも軽く、広い空間で緑色が気に入って購入しました。テントを張り終わると、山の奥から音が聞こえ、見ると1人の男性が来て、テント泊をするようでした。話しかけると、千葉から来て自分とは別の登山口から登ってきたとのことで、ルートの様子など情報交換ができました。山小屋まで水を汲みに戻り、ラジオを聞きながら食事を取り、明日のルートを考えて横になりました。



20時にテントの外を見ると、満天の星空だったので三脚とカメラを持って池の近くまで行って写真を撮りに行くことにします。真っ暗闇の草むらからガサガサ音がすると不気味でしたが、月明かりが池や遠くに見える山小屋を照らして幻想的な景色です。テントに戻ると、かなり寒いのでダウンなどを着込んで寝袋に入って眠りにつきましたが、それでも夜中は寒くて何度も目が覚めました。長い夜がようやく明けて、日が出てくると活動意欲も湧いてきて、太陽のありがたみを感じます。朝食後、テントを撤収するとテントを張った周囲の地面は凍っていたので、寒いはずです。



テント泊した男性と挨拶を交わして、6時半ごろ出発します。この日は、まず双子山を経由して、蓼科山を目指し、北横岳経由でロープウェイ乗り場に戻り、山麓駅まで歩こうと思います。双子山への道は緩やかで歩きやすく、眺めも良くて最高です。すぐ先には駐車場があるので、車を利用すれば簡単に双子池ヒュッテに来られるので、いつかまたテント泊をしに来ようと思います。蓼科山の山頂手前にある蓼科山荘へ到着すると、山小屋は閉まっていますが、小屋の前のスペースで休憩出来ます。



この山荘は登山道の分岐点に位置しているので、他の登山口から登ってくる登山者が大勢います。ここから山頂までは30分ほどで、登頂して再び戻ってくるので、メインのザックをここに置いて、最低限の荷物を持って、サブのザックで登頂することにしました。これまで17～18kg程の重さのザックを背負っていたので、サブザックのあまりの軽さに、まるで羽が生えたような感覚で急な岩場を登って行くことが出来ました。山頂は大きな岩がゴロゴロと敷き詰められた感じで、直径100mほどもある広い平面な場所になっていて、どこかの惑星にいるかのような風景です。広い山頂の中央には蓼科神社の鳥居と祠が立っています。



蓼科山荘まで戻ると、再び重いザックを背負って、次は北横岳を越えてロープウェイを目指します。この日はロープウェイは運行していないので、さすがに自分と同じルートに行く人はいないようです。手元の地図でコースタイムは3時間ほどですが、だいぶ疲れていたもので予定より遅れて、北横岳の山頂まで辿り着きました。



これで、今日は登りはなくなったので気持ち的にだいぶ楽です。昨日まで営業していた北横岳ヒュッテも閉鎖されています。後で調べると、この日からロープウェイが点検運休となり、北横岳ヒュッテは平日や宿泊予約がない場合は休館となっているようでした。

ロープウェイの坪庭まで戻ると誰ひとりおらず閑散としていて、滅多に見られない光景です。山頂駅は閉鎖されていて、人がいる気配はありません。ここから歩いて山麓駅まで戻ります。通常ならロープウェイで片道約7分ですが、ここから1時間近く歩くことになりました。疲労してなければ大したことない距離ですが、この日はテントを背負って、3つの山を越えて来たので、脚にだいぶ疲れが溜まってきてます。

北八ヶ岳のロープウェイには何回か乗っていますが、ロープウェイ下の登山道を歩くのは初めてです。大きく蛇行しながら、ロープウェイのロープを見ながらひたすら下って歩いていきます。

そして、ようやく山麓駅に着いて、チケット売り場の窓口に行くと、昨日チケットを販売したスタッフが申し訳なさそうに謝罪してきて、払い戻しをしてくれました。チケットを売った後に、その日でロープウェイが運休すると気付いて、まだ営業している双子池ヒュッテに泊まると思って電話をしてきたそうです。今回のようなアクシデントでもない限り、ロープウェイの下を通して下山はしなかったと思うので、貴重な経験が出来たのは良かったです。



Episode 029: 草津白根山（くさつしらねさん）



東京マラソン（2020 年）を 1 ヶ月後に控えて、群馬県にある馴染みのレストランに行き、以前に山で出会った東京マラソンを走ったことのあるマスター（Episode 025 参照）からアドバイスを受けて、近くの利根川（とねがわ）にかかる橋を走ってジョギングしました。翌日、そのまま北アルプスの南端に位置する雪山の乗鞍岳（のりくらだけ）を目指しました。天気は快晴でしたが、アイゼンだけで登ると雪に脚が埋まり、スノーシューがないと困難だったのと、途中でホワイトアウトにもなったので仕方なく撤退することにしました。



その後、新型コロナウイルス感染拡大の影響で東京マラソン一般ランナーの参加が中止となったうえ、日本各地でイベントの自粛が続き、2020年3月現在、終息する気配が見えない状況が続いています。

そんななか、次の登山に向けてスノーシューを買ったので、快晴のタイミングをみて草津白根山を目指すことにします。正式名称は白根山ですが、他の白根山と区別するため地域名「草津」を付けた草津白根山の名で呼ばれるのが一般的です。

標高は湯釜（ゆがま）付近の白根山が2,160mで、近隣の逢ノ峰（あいのみね）と本（もと）白根山を含めた三山を一つの火山体として捉える際は標高2,171mの本白根山が最高峰となっています。

白根山は1900年代に入ってから何度か噴火している活火山で、最近では2018年1月に噴火し、噴火警戒レベルが引き上げられました。その後、徐々にレベルが下がり、本白根山がレベル1（活火山であることに留意する）のときに登ることにします。



登山前日、山へ向かう途中に群馬県高崎駅で名物の「だるま弁当」を買いました。だるまの形をしたプラスチック製の真っ赤な容器に、山の幸（さち）を主体に盛り沢山の具材が詰め込まれている人気のお弁当です。このだるま弁当は今回の山行で重要なアイテムでもありました。それから、軽井沢方面に向かい車中泊をして、明け方に登山口となる万座（まんざ）温泉に向かって車を走らせます。

“万座しぜん情報館”という施設の駐車場へ駐車し、外に出ると硫黄臭（いおうしゅう）が漂ってきて温泉地を思わせます。除雪車が駐車場の雪を除雪しているところです。

インターネットで、ここ数日の登山情報を確認すると、本白根山の頂上の様子がアップされており、スノーシューかワカンは必須のようです。

着替えを済ませて雪山の装備を整え、7時半に登り始めます。登山口はいきなり急斜面になっていて雪もかなり深いので、早速スノーシューを装着することにします。同じ頃に1人の登山者も登り始めるところで、先に登って行きました。

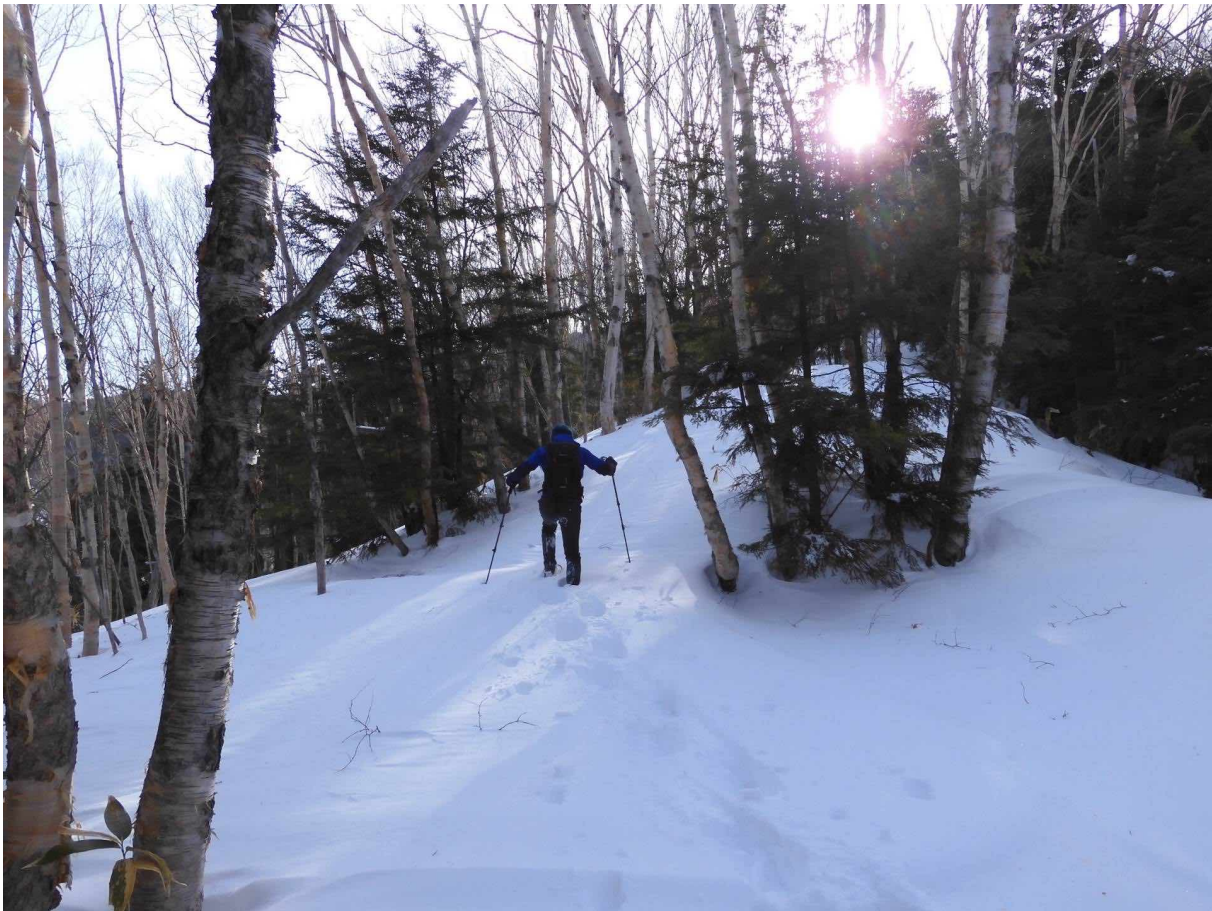


この急斜面は7～8メートルの壁のようになっていて、足場を確認しながら慎重に登っていくと、登りきるのに10分以上もかかりました。

その後は緩い登りが続き、危険な個所ありません。遠くから山を見ると雪は少ないように見えますが、登山道は、けっこう積もっています。

初めて使用するスノーシューは快適で、脚が雪に埋まることもなく先に登った人の足跡を辿って行きます。

しばらく進むと、その人がワカンを付けていたので、挨拶を交わして自分が先に進みます。トレースはありませんが、登山道らしいルートをスマートフォンのGPSで確認しながら進んで行きます。



現在地を確認しようとスマートフォンを取り出そうとすると、ザックのショルダーケースにあるはずのスマートフォンがありません。ケースのジッパーが空いていたので閉め忘れて、なにかのはずみで落としてしまったようです。

幸いにも数分前に確認したばかりだったので、慎重に雪の上を確認しながら戻ると雪の中に刺さっていたので、とりあえずほっとしました。しかし、しばらく雪の中であって濡れたせいでバッテリーの残量が一気に減ってしまったようで、下山するまで保ちそうにありません。

ちょうどワカンを付けていた登山者が登ってきたので、二人で方向を確認し、先頭を交代しながら樹林帯を進んでいきます。途中で彷徨（さまよ）いながらもGPSを頼りに地図上にある稜線を目指して進んでいくと、別の方向から続いているトレースを発見しました。おそらく、昨日までの何人も通った様子のはっきりとしたトレースだったので、このまま辿って行けば迷うことはなさそうです。



日差しも温かいですが、立ち止まって休憩するとすぐに体も冷えてしまいます。今回は登る直前に紅茶を沸かして保温ポットに入れてきたので、途中の休憩でもあたたかいドリンクを飲んで、快適な登山です。

樹林帯を抜けてくと開けた斜面になり、そこから振り返ると北アルプスの山々が綺麗に見えます。このスノーシューは外側のエッジにも刃があり、ある程度の斜面でも問題なく登っていただけます。3時間ほどで頂上付近の開けた場所に到着すると、山越しに浅間山が綺麗に見えました。ちょうどスマートフォンのバッテリーがなくなる頃でした。



この開けた場所には“本白根山”と書かれた山頂標識がありますが、実際のピークは左奥に見える山が本白根山の最高地点となり、雪の上をトレースが続いています。ここまで来たら最高地点までには行っておきたいので、樹林帯の中を進んでいきます。

本白根山のピークとなる場所はただの樹林帯で、木の枝にピンク色のテープが貼ってあるだけです。

周囲の雪景色を撮っていると、山頂標識のあたりに途中まで一緒に登ってきた登山者がやってきたようです。下山するときすれ違おうと、「登るの早いですね」と声を掛けられました。



そして、山頂標識のところまでやってきて写真を撮った後、急いでやることができました。だるま弁当の容器で雪だるまを作るのです。以前、他の雪山で見たときに面白いと思って、いつか雪山で自分も試そうと考えていて、途中でお弁当を買ってきたというわけです（Episode 021 参照）。

だるま型の容器に雪を入れて圧縮すると、面白いように綺麗なだるまが出来るので、本白根山をバックに山頂標識と記念撮影を試みます。

山頂標識には雪ダルマを置く場所がないので板の角に刺そうとしますが、なかなかうまくいきません。他の登山者が向かってくるので急いで作り直し、3個目のだるまで成功し写真を撮ることが出来ました。すぐに登山者がやってきたので、いいタイミングでした。その登山者は雪ダルマに驚いている様子で、だるまと記念撮影をしていたので、作った甲斐がありました。

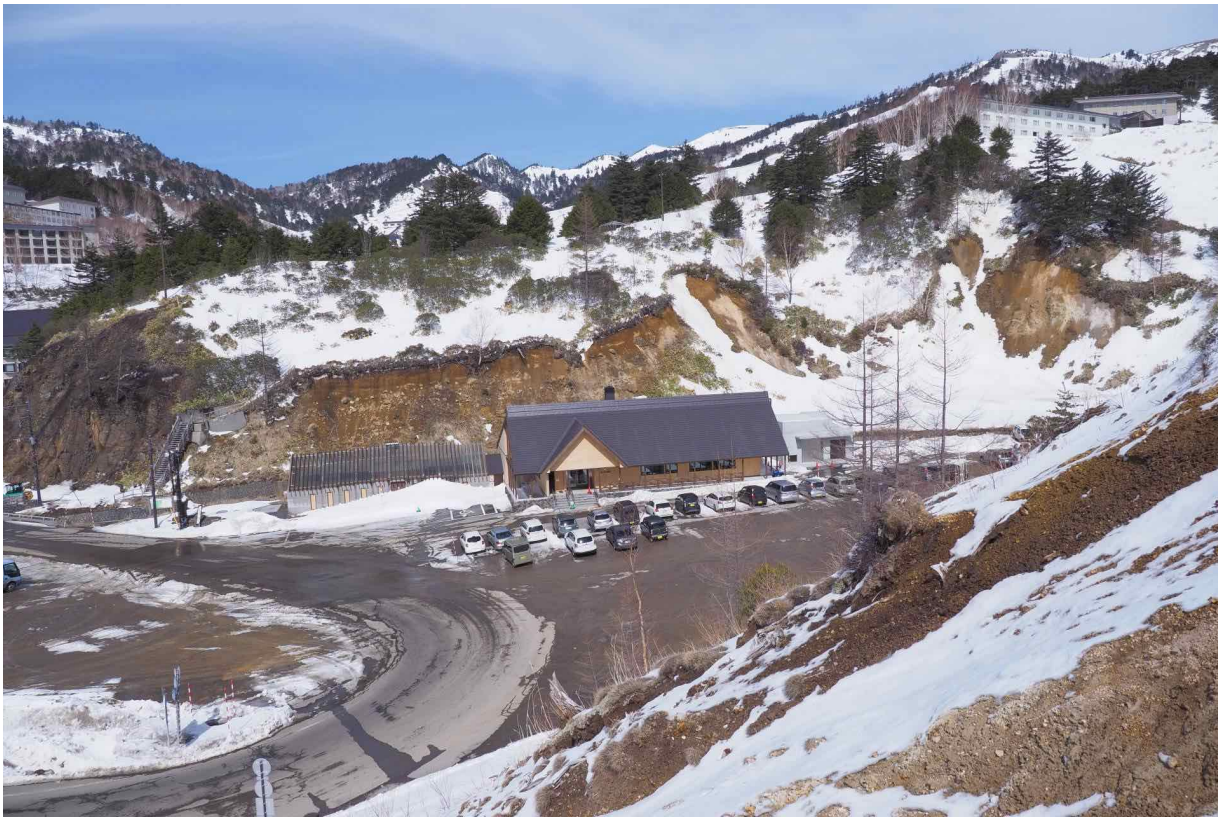


アイゼンを使用することなくスノーシューだけで登頂が出来て、今度はそのまま一気に下山します。数人の登山者とすれ違いますが、思ったより登山者は多くありません。

だいぶ下ると、途中でトレースが2手に分かれています。ひとつはおそらく登りで自分が合流したトレースなので、別のトレースに進むことにします。

昨日までのトレースに雪がうっすら積もっている感じで、この日歩いた様子はありません。下山するまでは誰とも会わず静かな雪道を楽しみます。たまに雪原に動物の足跡が残っていて、何の動物だろうと想像を膨らませながら下りました。

2時間近く下山してきて、遠くに万座スキー場が見えると登山口となる駐車場が近付き、最後の急斜面を時間をかけて慎重に下りて無事に戻ってきました。



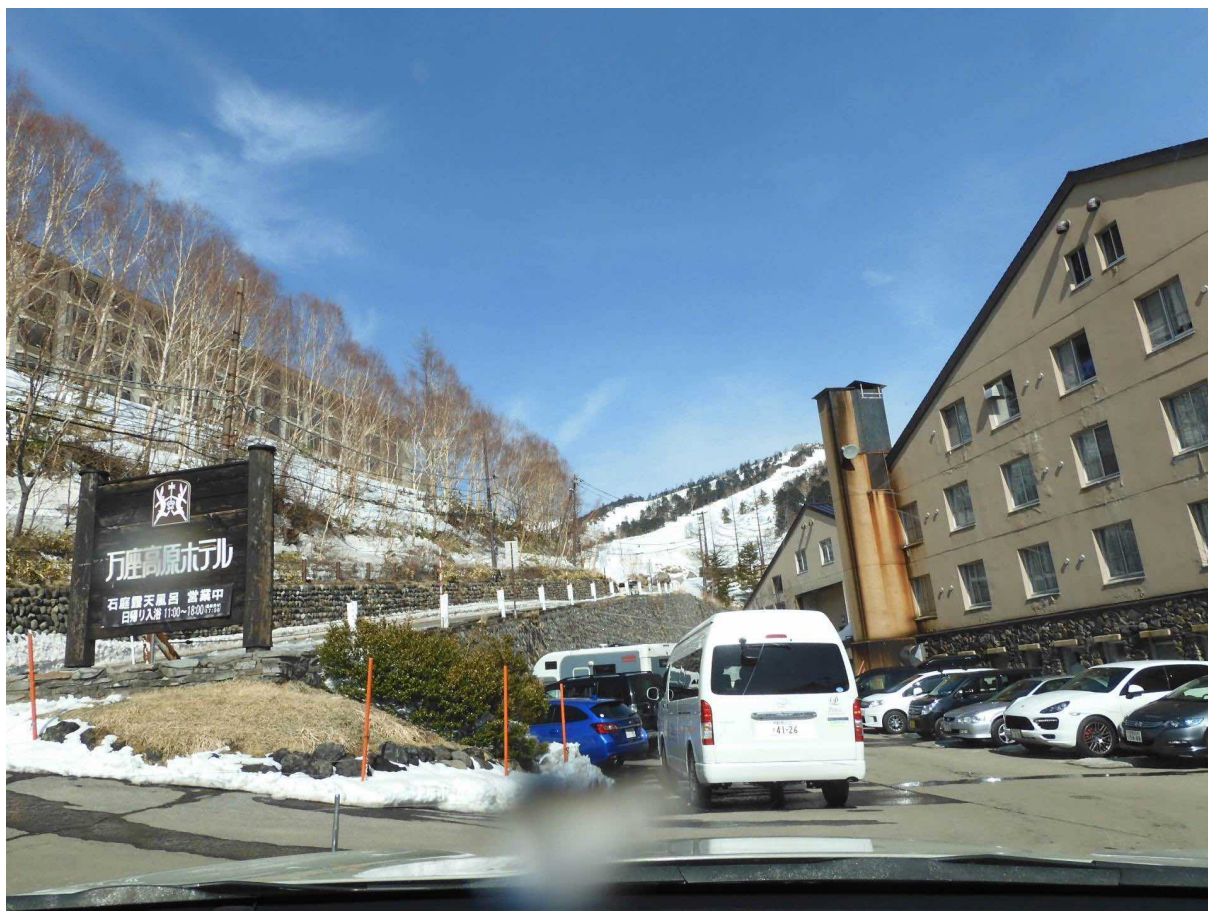
ザックを降ろして靴を履き替え、“万座しぜん情報館”へ入ってみます。ここは万座、草津地域の自然を紹介していて、季節の動植物や火山などを学ぶことができる施設です。本白根山のピンバッジを買って、売店の人から入山規制について話を聞きました。

そして、硫黄成分の含有量が日本一という万座温泉へ向かいます。マップを入手し、車で数分も行くと宿泊施設が密集する温泉街です。周辺にスキー場もあるため、宿泊施設も多く、スキー客で混んでいます。

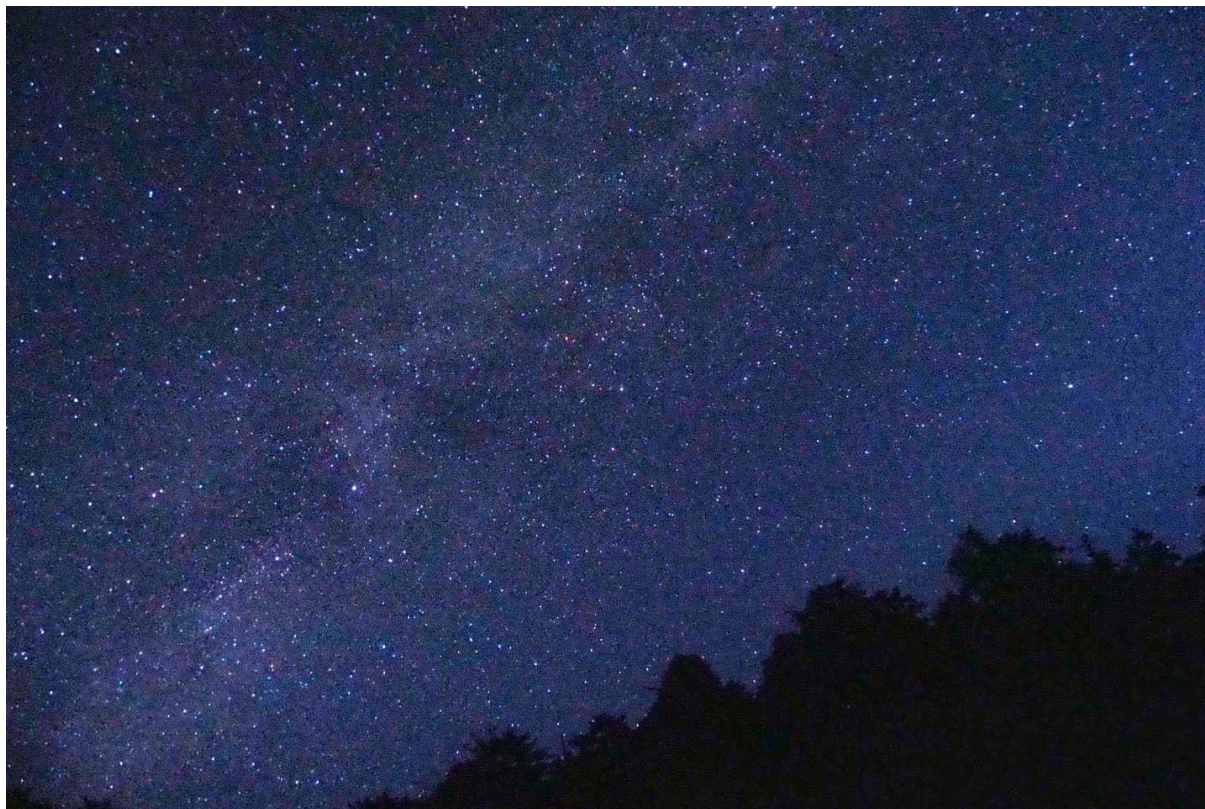
早く入浴したかったので、近くの万座高原ホテルで日帰り入浴をすることにします。ここは標高1,800mの場所に混浴の露天風呂があり、温度や効能が異なる8種類の温泉が楽しめます。

雪と青空を眺めながら入る登山後の温泉は最高のひとときです。

草津白根山といえば湖面がエメラルドグリーンに輝く火口湖の湯釜が有名ですが、現在は周辺の立入りが規制されているので、また安全に登れる時期に再び訪れて、草津温泉も堪能したいと思います。



Episode 030: 御嶽山（おんたけさん）



4月から5月（2020年）にかけて出されていた緊急事態宣言の後も新型コロナウイルスは収束の兆しが見えず、登山は控えていました。さらに、今年は異例の長梅雨（ながつゆ）で関東地方は8月になって梅雨明けとなりました。そして、梅雨が明けた快晴の日、ようやく登山に行ける 때가やってきました。久しぶりとなる登山で、登るのは中央アルプスの御嶽山です。御嶽山は北アルプス連峰から離れた独立峰で、今も活動している火山です。最近では2014年9月に噴火し、58名が犠牲者となる痛ましい事故があり、2020年現在も5名が行方不明となっています。

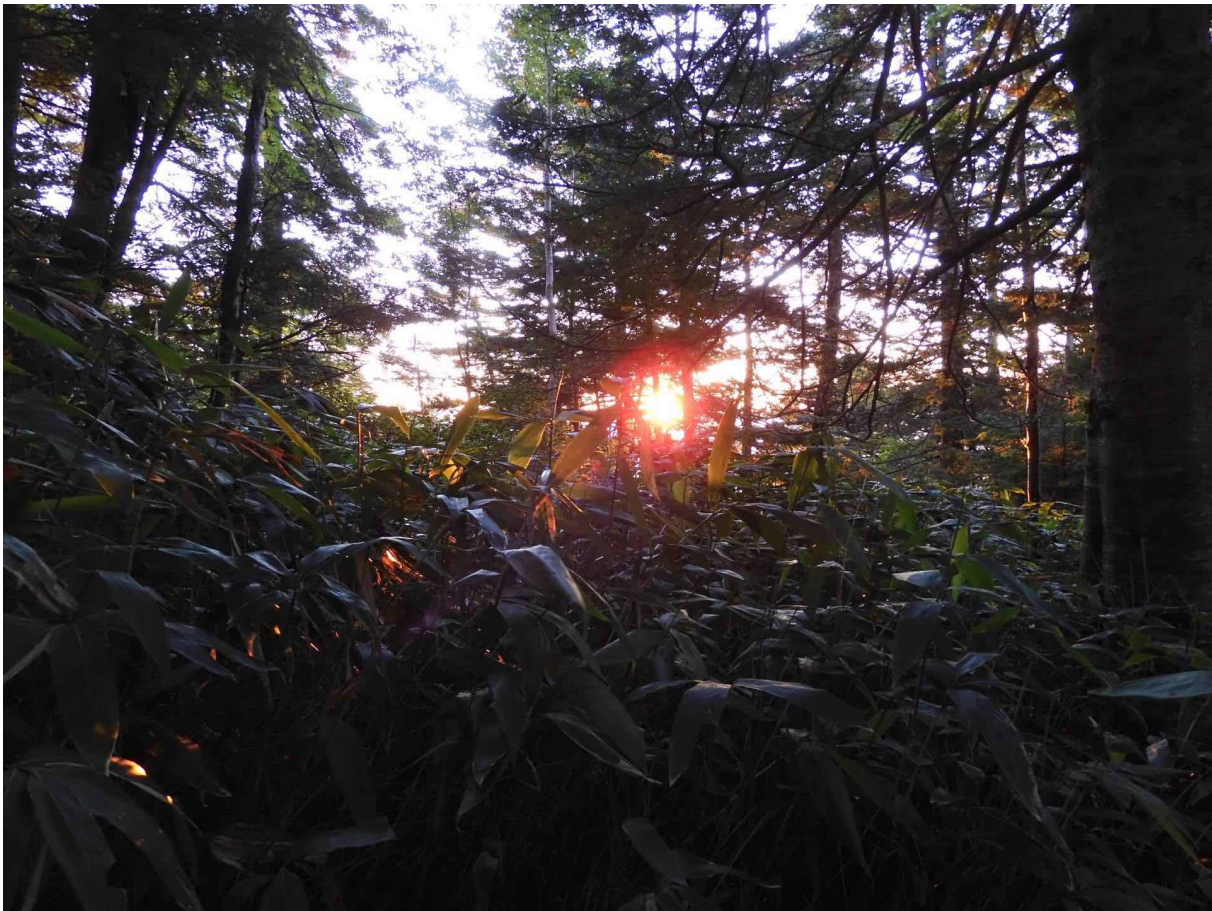
その後、入山禁止となっていましたが、2019年に期間限定で登山可能となり、今は規制されている区域があるものの、山頂までは登れるようになっています。

登山口はいくつかあってロープウェイもありますが、早朝に登り始めたいので、六合目となる中の湯登山口まで車で行き、そこから登り始めることにしました。

東京方面から向かい、八ヶ岳SAで休憩すると空はよく晴れていますが、雲が多く月にかかっていました。仮眠した後、登山口へ向かいます。石碑が立ち並ぶ真っ暗な山道を登って行くのは、少し不気味な感じです。

夜中の3時過ぎに登山口へ到着すると、既にかかなりの車が駐車しており、その後も次々にやってきます。空を見上げると満天の星が輝いていたので、車の中からフロントガラス越しに写真撮りますが、車のライトが邪魔であまり長くは撮影出来ません。

次第に空が明るみ、星たちが消えていくところでした。



まだ真っ暗な時間帯から登り始める人もいますが、もう少し明るくなってから登るつもりなので、少し仮眠して4時半過ぎに車を出ることにします。

日帰り登山なので装備も軽装ですが、現在は噴火の確率は少ないとはいえ、ヘルメットは必需品です。かなりの暑さになりそうなので、日焼け止めも忘れずに塗ります。

ちょっと歩くと登山道入口の手前に建物があり、コロナ対策として係りの人が登山者1人ひとりに対して検温を行っていました。登山届を提出すると、警戒区域が分かる地図と注意事項の書かれた紙を受け取って、いざ登り始めます。

約5ヵ月ぶりの登山でテンションはあがり、意気揚々（ようよう）と登っていきます。しばらくして、登山道へ朝日が差し込んできて、木々の間から太陽が見えました。

樹林帯を抜けて見晴らしが良く雲海が綺麗に見える場所に出ると、そこで休憩していた人と自然と会話が弾みます。

登り始めて1時間半ほどで、八合目にある女人堂（にょにんどう）という山小屋に到着します。山小屋前には休憩できるスペースがあり、下は雲海が広がる景色が眺められ最高の場所です。ほとんどの登山者はここで休憩し、食事をしたり、写真を撮ったりして、時間を費やします。



見上げると御嶽山の頂上部が眺められます。山頂部は最高峰の剣ヶ峰を中心に継母岳（ままはだけ）、継子岳（ままこだけ）、摩利支天（まりしてん）山などの峰々が並んでいます。御嶽山全体としては、裾野が広く台形の山容をしていて、ひとつの独立峰として大きく存在しているので、他の山からでもすぐに認識できます。

登り始めてから3時間ほどで頂上付近に到着すると、3つの避難用シェルターが設置されています。



これまで御嶽山にはシェルターがなく、2014年の噴火後にこのシェルターが設置されました。1つのシェルターには30人収容出来て、これで噴石から身を守ります。シェルターの横には噴火のことが刻まれた慰霊碑があり、すぐ前にある被害を受けた山小屋は解体されている最中でした。

階段を登り、鳥居を潜ると標高3,067mの頂上です。ちょっとしたスペースになっていて既に数人が登頂していて、その後も続いて登山者がやってきます。



頂上のすぐ下には、日本最高所の湖である二ノ池が見えます。御嶽山の頂上部には一ノ池から五ノ池まで湖があり、一ノ池は水が涸れていますが、他の湖はそれぞれ特徴を持っています。二ノ池の遠くに目を向けると、雲にかかった北アルプスの山々が見渡せます。穂高岳、槍ヶ岳は次の山行で行く予定です。

食事をしていると隣の男性が写真を撮ってほしいと話しかけてきて、しばらく山の話で盛り上がりました。次は北アを目指すというと、彼は東北の山を巡って来るそうです。

山頂を後にして、二ノ池方面へ向かいます。一部干上がった湖の脇を歩き、山小屋を通過して、サイノ河原と呼ばれる広い平地を超えていきます。青空と山の緑とがよく映えて、夏のアルプスを感じます。



サイノ河原を超えると、三ノ池が眼下に見下ろせます。

三ノ池は、5つの湖のなかでも、一番面積が大きく、コバルトブルー色の綺麗な水を蓄えている日本最深の高山湖です。この美しい湖を見るのも御嶽山へ登山の楽しみのひとつです。

2014年の噴火前に登ったときは、三ノ池近くの山小屋に一泊しました。その時は時間もあり、翌日に外輪山を歩いて今回は行かない継子岳へなどにも行ったので、三ノ池の景観を色々な角度から楽しむことが出来ました。

噴火後も三ノ池の美しさは変わっていません。

そういえば、噴火後に二ノ池近くに新たな池が出現したというニュースがありました。以前はすぐに干し上がっていた雪解け水や雨が、噴火で積もった火山灰が水を通さなくなり、湖になったとみられています。山小屋関係者は「二・五ノ池」などと呼んでいるそうですが、こうして湖が出来ることを考えると、自然の力には圧倒されます。

三ノ池を眺めた後は、岩場を進んで摩利支天と呼ばれる外輪山のひとつの山頂へ向かいます。山岳信仰の山ではこのように呼ばれる峰があり、以前は甲斐駒ヶ岳にもありました（Episode 018 参照）。

岩場の間に分かりにくい山頂標識があるだけで、探している登山者に教えてあげます。すると、あれだけ晴れていた空も急にガスが湧き、御嶽山も三ノ池もまったく見えなくなりました。



下山ルートを探ると三ノ池からも下るルートもありますが、登山口で配られたマップでは通行止めになっているので、登ってきたルートに戻ることにします。

戻る途中にある二ノ池山荘前で休憩していると、白い装束（しょうぞく）を来た一行が向かってきます。登る途中にも何度かこのような集団を見かけましたが、ほら貝を吹いて、全員で唄いながら登っていて、御嶽山が信仰の山なのがよく分かる光景です。

深田久弥の「日本百名山」の著書の中にも、“道が白く見えるくらい白衣装束の信者が続く”と書かれていますが、いまでもそのスタイルは継承されています。確かに、登山道のいたる所に石碑や宗教的モニュメントが多く建っているので、古くから信仰の山として登られてきたのが感じ取れました。



八合目の女人堂に着くと、登りのときは閉まっていた山小屋も営業していたので、ピンバッヂを買えました。この女人堂の名前は、明治以前、この八合目より先は神の聖域とされ、女性は登山が許されず頂上を目指した男たちの帰りを小屋で待ちながら参拝した御堂だったのが由来となっています。

ここからの下山の道のりは本当に長く感じられて、駐車場に到着したときは脚もガクガクでした。そして、ガイドブックにも紹介されていた温泉に直行し、汗を流すとお腹も空いてきました。

せっかくだからこの辺りの名物料理を探すも、ほとんどの店が夕方からの開店で諦めましたが、途中で食堂を見つけて満腹になりました。

久しぶりの百名山は疲れ果てましたが、これだけ自粛した後の登山だったので、その疲れまでも愛おしく感じられました。



より多くの写真を添えた登山記録は、以下の著者ブログでお読みいただけます。

<http://hodakaclimber.blog.fc2.com>

(本書は、**The BBB: Breakthrough Bandwagon Books** のために書き下ろされたオリジナル作品です)

The BBB での穂高著作リスト

JAPANESE 100 GREAT MOUNTAINS
VOL.1: EPISODE 001-005 (JP) HODAKA



百名山ピークハント Vol.1: Episode 001-005
<http://thebbb.net/jp/ebooks/japanese-100-great-mountains-vol1.html>

JAPANESE 100 GREAT MOUNTAINS
VOL.2: EPISODE 006-010 (JP) HODAKA



百名山ピークハント Vol.2: Episode 006-010
<http://thebbb.net/jp/ebooks/japanese-100-great-mountains-vol2.html>

The BBB での穂高著作リスト



百名山ピークハント Vol. 3: Episode 011-015
<http://thebbb.net/jp/ebooks/japanese-100-great-mountains-vol3.html>



百名山ピークハント Vol. 4: Episode 016-020
<http://thebbb.net/jp/ebooks/japanese-100-great-mountains-vol4.html>

The BBB での穂高著作リスト

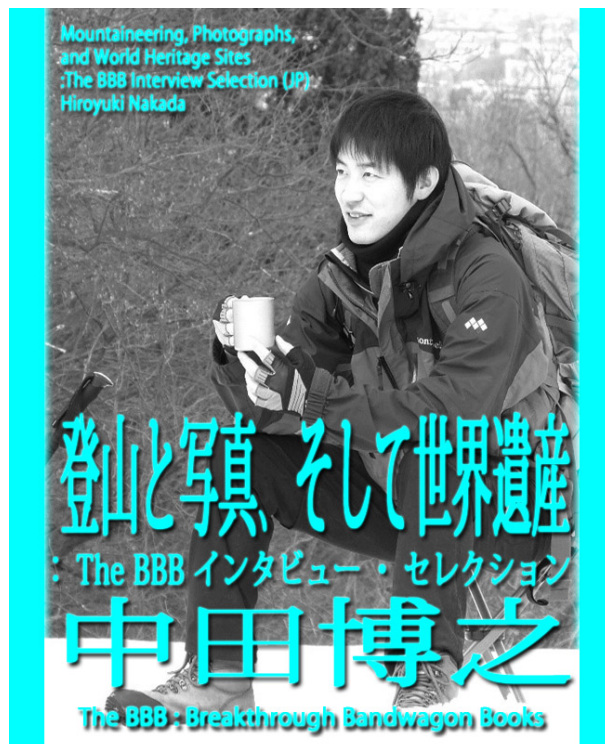


百名山ピークハント Vol.5: Episode 021-025
<http://thebbb.net/jp/ebooks/japanese-100-great-mountains-vol5.html>



Cast Party 2018 (Jp)
<http://thebbb.net/jp/ebooks/cast-party-2018.html>

The BBB での穂高著作リスト



登山と写真、そして世界遺産（中田博之名義）

<http://thebbb.net/jp/ebooks/mountaineering-photographs-and-world-heritage-sites.html>